

老いの学習の方策と課題

- 米国 Aging Educationの事例からの考察 -

阪本 陽子

(文教大学付属教育研究所客員研究員)

A Study on the Method of Learning about Growing Older ; By the Example of the Aging Education in U.S.A.

SAKAMOTO YOKO

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)

要旨

老いは人生の後半にのみ現れる現象ではなく、人生の連続した過程である。老いを学習することは、老いの知識、価値、態度を自己のうちに形成していくことであり、その視点に立てば、老いは子ども期から捉えることができるテーマである。

本稿は、老いの学習の具体的方策となる米国での実践事例を参考にしながら、その学習のあり方を考察する。

1. 研究の位置づけ

1) 老いの学習とは

私たちは日々年をとっているのだが、いったい人生のいつ頃から「年をとる」ことが「老いる」ことになるのかは明確ではない。

人間の生涯発達段階において、「老」の文字が使用されるのは「老年期」である。「老年期」とは一般的には、年をとって、肉体的、精神的な衰えが種々な形であらわれる時期を指す。出生年齢での明確な区切りはないが、わが国においては65歳以上を「高齢者」「高年齢者」「老人」とし、また一般的には60～70歳で退職の時期を迎えることが多いというあたりからも、おおむねその頃が「老年期」のはじまるといえる。

しかし、老年期はそれだけが孤立して存在しているわけではない。老年期の始まりを65

歳だとしても、それ以前にすでに65年間の人生があったわけであり、それまでの人生の影響を受けることなく老年期が存在することはあり得ない。つまり、老いは人生の連続した過程であって、生き方の問題なのである。

老いというものには、年齢の基準によって確固たる定義や基準があるわけではなく、社会によって、個人によって、その価値や評価は異なる。老いには両義性があり、重ねていく時間に伴って起こる様々な変化を、愛しく感じこともあれば、恨めしく感じることもある。その変化をどう感じ、受け止めていくかは、自分の生き方次第なのである。

一般的に、子ども期は老いとは遠い存在とされている。しかし、老いは時間に伴う変化であり、時間の経過とそれに伴う変化というものは、人生のいつでも自己や周囲の人間に

起こり得ていることである。そういう視点に立てば、老いは子ども期から捉えることができるテーマなのである。

老いを学習するということは、老いを人生過程の中で捉え、老いの知識、価値、態度を自己の内に形成していくことである。老いを知覚し、認識するための知識や情報を得ること、老いを評価する判断基準となる価値を得ること、そして高齢期や高齢者に対する見方やイメージを得ることである。

老いを学習することによって、年を重ねていくという、人間の当たり前の営みを自覚し、それに対する自分の向き合い方を作ることができるのである。

2) 教育老年学の視点

「老い」の学問領域として老年学がある。老年学は、人間の生を妨げる老化の制御という研究を出発点としていたが、近年では老化の普遍性を認めながら、出生から死に至る生命の加齢現象全体を扱う立場が含まれつつある。そして、この老年学と教育学が結びつけられたものが、教育老年学である。

老いをどのように捉え、学習するのかという方策を考えるにあたっては、学際的な視点が必要なのだが、筆者はこの研究を、学校教育、社会教育が含まれる生涯学習の中で、教育老年学の視点から考察していきたい。

米国における教育老年学の先駆者といわれるピーターソン (D.A.Peterson) は、1970年代に成人教育と社会老年学との合流として提唱するこの学問領域を以下の3つの柱として定義した¹⁾。

1. 高齢層の人々のための教育作用
(education for older people)
2. 一般市民に対するエイジングおよび高齢者問題に関する教育的作用
(education for about aging)
3. 高齢者に関わる専門職や準専門職者への教育的準備

(education of professional and paraprofessionals)

さらに、ピーターソンはこの3つの柱と、研究の実践の部分に区分した構成要素を提示している。

		教育の対象者		
		高齢者の教育	高齢者についての教育	専門職の教育
機能	研究	教授的老年学	社会老年学	老年学教育
	実践	高齢者教育	啓発的老年学	老年関係専門職教育

表1 教育老年学の構成要素 (D.A.Peterson)²⁾

老いの学習を考えるにあたっては、ピーターソンの定義する「啓発的老年学」に注目したい。啓発的老年学とは、一般市民に高齢者の状況や老いの過程に関する情報を提供するところに主たる機能があり、学校教育における高齢者問題のプログラム開発、マスメディアを通じての高齢者に対するステレオタイプの是正、家族に対する高齢者問題に関する情報提供などを含んでいる。

しかし、近年の米国の研究を中心とする教育老年学の枠組みでは、「高齢者のための教育」と「高齢者についての教育」という視点のみが強く、「老い」が高齢者だけの現象であるような意識が強い。教育老年学は、「その文化土壌との関連のなかで、幾様にも変容しうる学問体形³⁾」とも評されるように、どこまでをその範疇とするのか、その体形は確立されていない。未だ確立していない学問領域の中で、自己が老いるという視点をどう取り込むかは今後の課題である。

2. 老いの学習の現状

1) 学校教育における老いの学習

義務教育段階においては、学習指導要領のレベルでは老いの問題は直接的に表記されていない。生物的加齢現象については、成長や発達という概念で捉え、成人期までの身体の変化を取り扱うに留まっている。小学校段階

では、主に「道徳」において、高齢者福祉の内容が取り上げられている。高齢者への尊敬と感謝、生命の尊さ、父母や祖父母を敬愛し、楽しい家庭づくりの楽しさが強調されている。学校教育における「老い」は、生物学的加齢現象そのものを捉える視点は少なく、高齢社会についての教育や高齢者福祉教育の中で扱われる傾向にあるといえる。

1995年の「エイジング教育」に関する調査⁴からは、小中学校における老いに関する学習は、高齢者福祉を中心に扱っていることがうかがえる。現場の教師の意見として、老いを高齢社会や高齢者だけに結びつけず、ライフコースやライフサイクルの問題もあわせて、人生全体を捉えることの重要性もあがっているが、教科へ取り入れにくく、時間的ゆとりもないため、現状では子どもたちが老いを学習する機会は少なく、また老いに向ける視点にも偏りがあることがわかる。

教科学習の中では、直接的に老いを扱うものが少ないものの、近年、体験学習の奨励や総合的な学習の導入に伴って、子どもたちが高齢者と交流する行事や授業が見られるようになってきている。高齢者と子どもとの「世

代間交流」が、高齢社会の学習として、福祉教育の一環として、また、地域の学校参画の方策の一つとして取り組まれているのである。

2) 世代間交流という方策

子どもたちは、高齢者と交流することで、年を重ねていく人間の姿を直接認識する機会を得ることができる。老いという現象に関する知識や情報を得て、それをどう評価するか、その価値の基準を自己の内につくるきっかけを得ることができる。老いの学習とは、老いの知識や情報を得ることと同時に、自己がどう老いという人生過程にどう向き合うかという姿勢を形成することであるから、その学習の機会として、高齢者との直接的な交流の機会を持つことは、学習の具体的方策として重要であると考えられる。

現在、学校教育や社会教育の現場において展開されている高齢者と子どもの交流事業の特徴は、表2のようにまとめることができる。交流の形にはいくつかの型が見られ、世代間の相互理解を目的としているが、直接的な「対話」をするわけではなく、何らかの共通作業を媒介し、副次的な結果として相互理解

交流の型	具体的活動	具体的実践事例
交流体験型	昔ばなし・スポーツ・ゲーム・手紙	・高齢者が小学校を訪問し、地域の歴史を語る平和の語り部をしたり、一緒に給食を食べるなどの交流。 ・暑中見舞い、敬老の日、年賀状等を書く手紙交流。
伝統体験型	農業体験・民芸品づくり	・休耕田を利用し、高齢者が指導しながら、小学生と野菜、水稲と一緒に育てる地域体験農園の交流。 ・高齢者団体のメンバーが、地域の子どもたちに竹とんぼ等の昔遊びを教える交流。
行事体験型	雛祭り・クリスマス・運動会	・高齢者と子どもがお正月などの伝統行事の意味を学びながら、一緒に行事を楽しむ交流。
慰問型	福祉施設訪問	・校区内にある老人ホームを訪問し、手紙やプレゼント交換するなどの交流。 ・校内音楽祭などに高齢者を招待する交流。
ボランティア型	子ども 高齢者	・高齢者の独居世帯への弁当配りによる交流。 ・高齢者福祉施設での、食事の配膳や介助による交流。
	高齢者 子ども	・高齢者の持つ知識や技術を活かして地域で活動する交流。
相互学習型	まちづくり活動	・高齢者と子どもが共に地域の史跡マップを作ったり、住みやすい街づくりを目指す交流。

表2 「高齢者と子ども」世代間交流の型

を促すような活動に集中している。

日本および米国の世代間交流の研究を行った草野ら⁵⁾は、世代間交流の課題を次のようにまとめている。

1. プログラムの目的を明確に持つ。
2. プログラムは世代相互のジョイント・パートナーシップで作成する。
3. 相互の協力関係の下にプログラムを組む。
4. 事前学習を含めた継続的トレーニングの中に位置づける。
5. スタッフのトレーニングが必要である。
6. 交流に対話を盛り込んだプログラムを組む。
7. 継続性を持つ。
8. 担当者の独自事業とならないよう、組織全体で使命を共有する。

現在様々に展開されている世代間交流といわれる事業は、交流の目的を明確にせず、ただ両者が空間を共にすることで事業を成立させてしまっている感がある。それは、「老人と子ども」という組み合わせが対のように語られる我が国の民俗的心象が、今日の高齢者と子どもの交流事業の根底にあるからであろう。したがって、このような交流の中では、高齢者は型にはまったイメージで登場し、高齢者と子どもの世代間交流は、ステレオタイプなものになる傾向にある。

世代間交流を老いの学習の一つの方策として考えるならば、その目的を明確に持ってその実施にあたらなければ、学習の機会を提供することにはなり得ないのである。

3) 米国での実践事例 “Aging Education”

米国、マサチューセッツ州ボストンで世代間交流のコーディネーターを務めるバーバラ・フリードマン (Barbara Friedman) は、自国の世代間交流事業の在り方に問題提起をしている⁶⁾。

米国においても、世代間の交流は学校教育における様々な交流事業の急速な増加や、早

期退職者による社会活動の増加という状況の中で、その機会が急速に増えてきている。世代間交流が、子どもたちの高齢者に対する否定的な態度を変える影響を与えていること、また、世代間交流による社会活動が高齢者の健康や生活に対する満足感を高めているということは、この領域の数々の研究で認められていることである。しかし、フリードマンは、交流活動の前に老いに対する学習が実践されていない一過性のプログラムは、しばしば結果が教化であったり、単なる感想を求めるものであって、子どもたちは自分たちが交流している高齢者の永続的な理解がほとんどできていないことを指摘している。そして、老いの学習は、行事活動としてではなく、学習者(子ども)の発達年齢に応じた内容として、既存の教科教育に統合し、一貫して継続的に行われるべきであることを主張している。

フリードマンは、“Aging Education (老いの教育)”の目標として、以下のことを掲げている。

- ・老いが自然で正常な、生涯にわたる過程であることを理解する。
- ・老いの肉体的、精神的要素を理解する。
- ・病気や衰弱などの老いの困難な側面を持った高齢者の立場、感情を理解する。
- ・社会の人口構成の変化に合わせ、適応していく必要があることを認識する。
- ・誤った社会を作り上げる年齢差別の源を見極める。
- ・高齢者の生活の現実と、彼らの生活様式と行動について認識する。
- ・高齢者が提供する歴史的な価値のあるものに気づく。

そして、これらを目標とした老いの学習のプログラムを提示している⁷⁾。このプログラムは、それぞれの単元が小中学校の国語や算数などの教科に導入できるように構成され、また、それぞれの単元で高齢者との交流を企画できるようになっている。

老いの社会的側面	
Lesson 1	社会の年齢差別と年齢の固定観念
Lesson 2	人口構造の変化
Lesson 3	家族構成の変化
Lesson 4	メディアの中の年齢差別
Lesson 5	文芸の中の年齢差別
Lesson 6	高齢者のための住まい
Lesson 7	限られた収入での暮らし
Lesson 8	老いの多様性
Lesson 9	子どもと高齢者に対する暴力
老いの心理的側面	
Lesson 1	年齢に適應すること
Lesson 2	生涯現役
Lesson 3	お年寄りになるってどんな感じ？
老いの歴史的側面	
Lesson 1	家族の歴史を辿ろう
Lesson 2	移民 - 今と昔 -
Lesson 3	宝物探し
Lesson 4	生活の移り変わり
Lesson 5	家族の伝統の物語
Lesson 6	時代の変化を知ろう
老いの身体的側面	
Lesson 1	老いのサイン
Lesson 2	健康に年を重ねるための食べ物
Lesson 3	年をとる中での運動の役割
Lesson 4	老いと病
Lesson 5	死に向かうこと、そして死

Barbara M. Friedman,
Connecting Generations, 1999, Allyn and Bacon
(日本語訳筆者)

このようなプログラムを教科教育に導入していくことによって、子どもたちは老いへの恐怖心を取り除くことができたり、外見の衰えだけで人の内面を判断してはいけないこと、あるいは、自分が高齢になった時にどのような趣味を持っていたいかなど、老いの知識を得て、自己の将来を描くことができるようになっていく様子が報告されている⁸⁾。

3. 老いの学習の課題

1) 米国事例からの考察

フリードマンの提唱する老いの学習プログラムには、様々な要素が盛り込まれている。人間の身体そのものの理解や、大きな歴史の流れの中で自己の位置を確認する視点など、従来のような「高齢者についての学習」を越えた学習を提供している。

しかし、このような学習内容は米国の文化を背景にして構成されているものであり、またそれぞれの単元で高齢者との交流を取り込

みやすいのは、米国の社会事情によるところが大きい。

例えば、老いの社会的側面の学習では、高齢者の生活の実情を理解するために、家庭の経済事情を学習する単元がある。これは数字を扱うため、主として算数や数学に統合されている。日本の文化では、子どもが家庭の経済事情に立ち入ることは一般的にはあまり好ましくないという観念がある。米国においても、同様の意識はあるようだが、一般的には日本より経済的な自立を早くに求められる米国では、幼い頃から生活経済についての知識をつけることに抵抗を感じないのかもしれない。

また、米国の場合には、高齢者を「社会資源」とみる見方が強く、その活用が社会で注目されている。このことが、高齢者が子どもの教育現場に参画する機会を容易に作り出している。日本と比較して、米国では社会問題が多様に存在している。社会階層によっては、親からまともな生育環境を与えられない子どもたちが、識字能力の欠如や、貧困や薬物による劣悪な状態で生活している姿も報告されている。そのような状況の中で、実の親に代わる愛情と教育を与える存在として、高齢者の祖父母の役割が必要となり、10代の親の補助として、また親の虐待からの保護、薬物異存からの自立など様々な社会援助プログラムのメンター（助言者・指導者）として役割を担うボランティア活動が報告されている。高齢者は米国社会における様々な問題を解決するための協力者であり、またそういった事態を引き起こす環境を未然に防ぐための「社会資源」なのである。そのような意識があるため、子どもをとりまく様々なプログラムの中で、高齢者の立場は積極性を持ったものになるのである。

2) 今後の課題

核家族化、都市化が進んだ現代社会の生活様式が、日常生活において自然に老いを学習する機会を奪ったという指摘をする人は多い。

身近に高齢者がいれば、日々の生活の中で人間の変化を学ぶことができたし、ゆったりとした生活の流れが、時を重ねていくことの重みを感じさせながら生活をさせたのだという人もいる。しかし、ただ「昔の生活は良かった」と過去の生活様式への回帰を望むだけでは、今の社会が持つ問題の解決は進まないの

である。
現代の社会では、老いを学習する必要がある。それは、生き方が多様になり、年を重ねて生きていくことの価値や意味も多様になったからである。どう年を重ねていくかは、自己の選択なのであり、その重ね方によって、人生は多様に変化するというを、「老い」を子どもたちに教える教育現場の人々が、認識しなければならない。

老いの学習の実践にあたっては、フリードマンが指摘しているように、まず、老いそのものについての理解を促す必要がある。それは、高齢者と単なる交流事業をしたからといって、得られるものではない。そのためには、日本の文化土壤に合った、老いの理論的な学習プログラムを組み立てる必要がある。また、同時に、学習の重要な要素である世代間交流を取り込みやすいような基盤を作ることも重要である。

老いの学習の成果は計りにくい。なぜなら、老いの学習の本当の成果は、学習者の老い方にあらわれるものだからである。それゆえに、学習の成果をどう評価するか、あるいは研究の成果をどう見るか、ということ自体もこの研究の課題である。

【注釈】

- 1) D.A.Peterson, Educational Gerontology: The State of the Art, *Educational Gerontology*, 1976, p62、日本語訳については堀薫夫『教育老年学の構想 - エイジングと生涯学習 - 』、学文社、1999、p2より引用。

- 2) D.A.Peterson, Who Are the Educational Gerontologist?, *Educational Gerontology*, 1980, p65-77、日本語訳については堀薫夫、『教育老年学の構想 - エイジングと生涯学習 - 』、学文社、1999、2ページより引用。
- 3) 堀薫夫、『教育老年学の構想 - エイジングと生涯学習 - 』、学文社、1999、p14
- 4) 国際長寿社会日本リーダーシップセンター、『地域社会における高齢者に関する福祉教育の現状についての調査報告書』、1995、調査において「エイジング教育」という言葉を使用している。
- 5) 草野(角尾)篤子、ナンシーZ.ヘンケン、『日本および米国における世代間交流』、信州大学教育学部教育研究指導センター紀要第7号、1999、p59-67より筆者まとめ。
- 6) Barbara Friedman, The Integration of Pro-Active Aging Education into Existing Educational Curricula, *Intergenerational Approaches in Aging*, 1997,p103-110
- 7) Barbara M.Friedman, *Connecting Generations*,1999,Allyn and Bacon
- 8) Ibid,p57,155,168

【参考文献】

- 柴田博・芳賀博・長田久雄・古谷野巨編著、『老年学入門 学際的アプローチ』、川島書店、1993
- 鎌田東二、『翁童論 子どもと老人の精神誌』、新曜社、1988
- 青井和夫、『長寿社会を生きる - 世代間交流の創造』、有斐閣、1999
- 社団法人 エイジング総合研究センター、『平成5年度/総務庁長官官房老人対策室委託事業 世代間交流に関する調査研究』、1994
- 財団法人 長寿社会開発センター、『世代間交流の理論と実践』、1996